



大手前大学
大手前短期大学リポジトリ

eラーニングの挑戦 新たなステージに向けて

著者	畑 耕治郎
図書名	New Vision Vol.3 大手前大学の新『教育力』"ユニット自由選択制" 深化への挑戦
開始ページ	75
終了ページ	78
出版年月日	2010-07-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1160/00000336/





eラーニングの挑戦 新たなステージに向けて

大手前大学現代社会学部准教授
eラーニング推進センター

畑 耕治郎

1. 「特別」なものから「一般」的なものへ

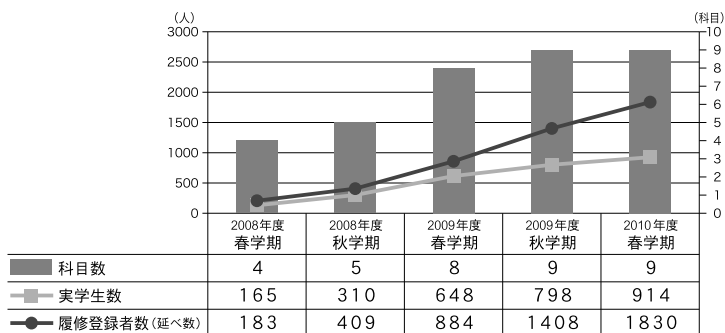
大手前大学では、2008年4月に通学制の教育課程(以下、通学制)においてeラーニング授業を導入し、今年で3年目を迎えます。eラーニング授業は、デジタル教材を用いた学習を主体とする授業形態で、決められた曜日時間に教室に集まる授業とは異なり、学習する場所や時間に制約がなく、自宅などでインターネットに接続されたコンピュータを用いて学習する授業です。教材の提供や試験の実施、質疑応答などの教育活動は、基本的にeラーニングシステムと呼ばれるインターネットを活用したWEBシステムを用いて行われます。

eラーニング推進センターは、その名のとおり、スタートしてからのこの2年間、eラーニングの推進とeラーニングを「授業」として成立させるためのデザイン設計に取り組んできました。特にデジタル教材の開発では、試行錯誤の連続でインストラクショナルデザイン理論などの教育理論の要素も盛り込みながら、教育効果の高い教材づくりに努めてきました。

当初、4科目からスタートしたeラーニング授業も現在では、春学期・秋学期を合わせて9科目18授業を開講するまでに至り、受講者数は年々増加の傾向が見られ、2010年春学期の受講者数は、延べ1,830名で実学生数に換算しますと914名(大手前大学:874名、大手前短期大学:40名)となりました。最近では、お昼休みなどに図書館やパソコン教室でeラーニング授業を受講している学生を見かけることも多くなりました。2009年度秋学期に実施した授業アンケートの「eラーニング授業に対する満足度に関する調査」では、80%以上の学生が満足していると回答し、同じく80%以上の学生が次回

もeラーニング授業を受講したいと回答しています。受講者数やアンケートの結果などからもeラーニング授業の気取りがうかがえます。学生にとって、eラーニング授業は、「特別」なものから「一般」的なものへとその認識が変わりつつあるようです。

Fig. 通学制eラーニング授業の受講者数とその科目数の推移



2.授業の面白さを引き出す個性あふれるデジタル教材

本学のeラーニングの特徴のひとつでもあるデジタル教材は、授業を担当する先生方と制作スタッフによりオリジナルに制作されたもので、いずれの教材も授業の特徴や先生の個性を存分に生かしたバラエティに富んだ教材となっています。通学制のeラーニング授業で培ったノウハウを生かし、通信教育課程(以下、通信制)では、「通信授業」と呼ばれる在宅学習による授業のすべての科目において、紙媒体のテキスト教材に加え、デジタル教材を提供しています。従来の通信教育では、テキスト教材のみを用いて学習する教育が一般的でしたが、本学では、学習の進め方を説明したり、テキスト教材を補う教材としてデジタル教材を活用し、教材の充実に努めています。一般的に通信教育では、学習を進める上で学習者のモチベーションの維持が大きな問題とされていますが、他の通信教育では類を見ない創意工夫を凝らしたデジタル教材の活用がこの問題解決に役立つことを期待しています。デジタル教材の開発は、先生方にとっても制作スタッフにとっても苦勞の多い大変な作業となりますが、制作実績を重ねるにつれてその完成度は日々向上しています。

3. 学習活動の可視化

本学のeラーニング授業では、通学制および通信制のすべての授業において、単元ごとに小テストやレポート、ディスカッションなどの課題を必ず課しています。課題は、すべてeラーニングシステムを活用して実施していますので、学習時間や課題の結果などの情報は、すべて学習活動記録としてデータベースに蓄積されています。これらの情報は、学習進捗や習熟度の把握に活用するだけでなく、学習者支援活動などにも広く活用しています。一見、当たり前のように見えるこの取り組みも、従来の通信教育ではすべての授業において、単元ごとに課題を課するような学習体系をとっていることは少なく、自宅での学習状況を詳細に把握することは困難とされていました。本学では、eラーニング授業の利点である「学習活動の可視化」に力を入れていて、今後可視化の精度を高め、学習指導や学生指導に積極的に活用していきます。

4. 新たなステージに向けて

eラーニング授業の実施方法やデジタル教材の作り方などについては、eラーニング授業を担当する先生方のご尽力のおかげで、ひとつの教育デザインを確立することができました。まだまだ、改善しなければならないことばかりですが、本学のeラーニングは、初期の目的を達成し、次なるステージに向かう時期に來たと言えます。

eラーニング推進センターでは、新たなステージに向けて次の3つの目標を掲げ、関係部署と協力しながらさらなるeラーニングの進化に挑戦していきます。

1. eラーニング授業の「質の保証」への取り組み
2. 戦略的eラーニングの活用
3. ネット時代に即した学び場の構築

まず、通学制では、eラーニング授業の科目数と受講者数が増加する中、eラーニング授業が楽に単位が修得できる科目とならないための「質の保証」への取り組み、次になぜ、eラーニング授業を活用するのかということを再定義することも含めた「戦略的eラーニングの活用」の設計が急務であると考えています。

また、通信制では、ネット時代に即した学び場の構築に着手しなければならないと考えています。一般的にeラーニング授業は、eラーニングシステムと呼ばれるネット上につくられたバーチャルな空間で行われます。これまで本学が取り組んできたeラーニングは、いわば、バーチャルな「教室」の中での教育活動について、いろいろとデザインしてきたわけですが、通信制ではバーチャルな教室を出ても、そこには、さらにバーチャルな空間が存在しています。この教室の外にあるバーチャルな空間は、本学が未開拓の領域であり、eラーニングにとっても、通信教育にとっても、この空間デザインが今後の大きな課題のひとつであると考えています。このバーチャル空間を学習の場という観点から考えますと、通信制で提供している170科目の授業を学ぶフォーマルな学び場と授業とは異なる形で学びを喚起するインフォーマルな学び場が共存しているのではないかと考えています。特に通信制には、さまざまな経験や知識を持った学生さんが集まってきます。フォーマルな学び場では、これまでの経験などを生かし、さらに学びの世界を深く掘り下げてもらい、インフォーマルな学び場では積極的に他の受講生と情報を交わし、互いに刺激し合い、各自の学びの世界を広げてもらいたいと考えています。

そもそもeラーニングは、インターネットとの親和性が高く、インターネット上に存在するさまざまなサービスと連携して学び場を充実していくことは技術的には容易なことです。しかしながら、本学のeラーニングがさらに上のステージに進んでいくためには、技術面だけではなく、大学教育全体として、多様な視点でこの学び場のデザインに取り組む必要があります。

通学制、通信制ともに教職員にとっても、eラーニングが「特別」なものから「一般」的なものへと認識を変えなければならない時期なのかもしれません。